
アンブレラ ～君と共に～

結城陸空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンブレラ ～君と共に～

【Nコード】

N8245A

【作者名】

結城陸空

【あらすじ】

『傘』から生まれた物語。『傘』では明かされなかった真実を含めた完全版。『傘』を読んでいなくとも分かるようにしてありますが、『傘』を先にお読み頂くとさらに楽しめると思いますので、ぜひ先に『傘』を読んでみてください。

Prologue 傘

僕はあの日、君の傘になることを誓ったんだ。

君が、雨に濡れないように・・・。

どんなに激しく冷たい雨が降っても、君を絶対に守ることを誓った。

君が、雨に濡れないように・・・。

君が雨を降らせるようなら、僕は君を笑わせる。

君の足元にできた水溜りに笑顔映してみせる。

もう君が悲しむことが・・・雨を降らせることがないように。

だから。

この世にいる意味を探して。

だから。

もし心を打ち砕かれても。何か伝えられるから。

だから。

君が君で居られることが何より生きていく意味に変わる。

だから。

きっと君の心の隅にも笑顔が生まれる。

だから。

君の肩が冷たく震えないように。

君に降る雨は全部僕がつける。君が濡れないように。

そうすればいつか必ず。

俺は君と共に。

虹を見る。

そう誓ったんだ。

～Prologue～ 傘（後書き）

アンダーグラフ

アルバム 『ゼロへの調和』収録曲

『アンブレラ』

読んで頂きありがとうございます。今回この歌をテーマとして作りました。感想、評価など頂けたら幸いです。

話は全部できているので、時間が許す限り毎日UPしますので応援よろしくお願いします。

rain 1 - 1 玉木恵美

冬の季節が終わり、冬から春へと移り変わる狭間。

虫や植物が命を吹き返し、生まれ変わる。

空から降る命の源を吸い、命の炎を燃やし始める。

『雨』という名のそれは絶えず天から生命の袋を持って地上に降り、地中に身を隠す。

やがて、仕事を終えるとそれはまた再び天へと帰っていく。

そうしてまた、生命の袋を持って地上に降りる。

新しい命が育まれる季節。

三月。

「聡！」

聡とは僕の名前だ。それでも自分で自分の名前を気に入っている。なにより呼びやすいらしく友達から知人に至るまでみんな名前で呼んでくれる。

僕にも当然、栗谷という苗字があるのだが、みんな名前で呼ぶ。

だから実はそんな自分の名前が気に入っている。

「聞いてんの？聡？」

さつきから僕の名前を呼ぶのは玉木恵美。僕らはいま大学生だが高校生の時からの友達だ。

恵美はほんとに人間なのかというくらい可愛い子で、芯もしっかりしているとてもいい子だ。とても友達思いで、なにをやるのもめんどくさがったりしない。何に対しても一生懸命でどんな小さなことにでも全力でやる。

僕はそんな彼女に恋心を抱いていた。けどこない子が僕を好きであるはずがないことは分かっていた。でも彼女と一緒にいれらるほど好きになる。

「聡？無視？」

「あ、ごめんごめん。ちよつと考え事してて」

「考え事？珍しいわね。聡が考え事なんて」

「いやいや、僕も考え事くらいするから」

僕は自分の顔が少し赤くなっていることに気が付き、それを必死に隠すように話していた。

「まあいいや。あのね、今度みんなでキャンプに行くんだけど聡もどうかなって思ってた」

「みんな？」

「うん、涼子に仁美に健二と信哉」

いま恵美があげたのはみんな仲のいい僕の友達だ。

僕と恵美を含めたこの六人はよく一緒に行動している。遊びに行ったり、飲みに行ったりするのめたいいてこのメンバーが多い。

「え？いつの間に計画してたんだ？そんなこと・・・」

「えへへ、聡を驚かせようとして、あたしがみんなに黙っておいてって頼んだの」

恵美は善悪のない無邪気な笑顔で話す。

「それで行く？・・・よね？」

「ああ、もちろんいいよ」

「ほんと！？やったね！」

いつも思うが恵美は笑顔が素敵だ。まさに名は体を現す。恵美は笑みの達人だ。

きっと人生を本気で楽しんでいるんだろうなと思う。恵美がすてきだから恵美の周りにはいつも人が集まって自然に笑顔が溢れている。

rain 1 - 2 笑顔

僕達は学校の帰り道を歩いていた。

この時は恵美と2人きりになれる貴重な時間。

とはいっても駅から降りて途中の別れ道までのほんのわずかな時間だが。

僕にとってはこれほどうれしいことはない。

なにしろ好きな子と2人で一緒に歩いているんだ。

まるでプチデートみたいだと思う。

僕と恵美は途中の十字路で別れを告げる。また明日もこの十字路で出会う。

毎日その繰り返しだ。

「じゃあね、おつかれ」

恵美はいつもの素敵な笑顔で別れを告げた。

「うん、おつかれ」

僕も負けずと笑顔で返すが、恵美の笑顔にはとてもかなわない。

恵美の笑顔には汚れがない。純粹でやさしい笑顔を持っている。近所でも評判なくらい人なつっこく子供も好きだから、近所の子供と遊んでるところをたまに見る。

だからなのか、恵美の笑顔に無邪気さが残っているのは。

恵美には母親はいない。まだ恵美が小さい頃に病気で亡くなったらしい。

いまは、父親と2人暮らした。

恵美の父親も恵美を養うために、大学に行かせるために必死に仕事をしてきて今は体調があまりよくなく、仕事も休みがちらしい。だから父親の面倒は恵美が見ている。

だから恵美は母親のような役割を得ているのだろう。

だから、面倒見がよく、人の気持ちもよく分かり、聞き上手なのだろう。

僕はときどき思う。普通の人よりすごく苦労しているはずなのに、どうしてこんな笑顔でいられるんだろうと。

でも僕は、たぶん分かってる。

明るく振舞う君の奥には寂しさがあることを。

それを必死に隠すために笑顔でいるんだということを。

僕は、寢床に就くときはいつも恵美のことを考える。

今日話したこと、明日話したいこと。

今日笑ったこと、明日笑いたいこと。

恵美ことを思い出すと自然に笑みがこぼれる。

でも1人で笑っていると変な人に見られるかもしれないな。だれもないけど。

そんなことを思っていると、いつの間にか眠っているのだ。

幸せを感じながら。

rain 1 - 3 サプライズ

今日の天候は晴れ。

海の青がそのまま映し出された青空はとてもまぶしくて穏やかだ。
気持ちいい風がどこからともなく吹く、春を感じさせる天候。

今日はキャンプ当日。

涼子に仁美に健二と信哉に僕と恵美の6人で都会からすこし離れた
キャンプ場に来ていた。

僕らは、2台の車で3人ずつ分かれて乗っていた。

僕の乗っている車には、涼子と健二と僕が乗っていた。恵美とは別の車だ。

「なあ、健二ちょっと聞きたいんだけど」

僕は、突然切り出した。

「なんだよ？ 聡」

窓から外を眺めていた健二がこっちに振り向き答える。窓の外には
田んぼが並んでいて、一目で田舎だと分かる。

僕はこっちを向いた健二に向かって問いかけた

「今回のキャンプの話、誰が計画したんだ？」

「計画したのは恵美よ」

運転していて、黙っていた涼子が答えた。

涼子はグループのリーダー的存在で、カラオケなどの遊びや飲み
いく話のほとんどは彼女が言い出す。僕らの行動の鍵を握っている
存在だ。僕はこんどはその涼子に問いかける。

「え？ 恵美が？」

「そつだよ、聡には黙っててって言ってたな」

今度は健二が返してきた。

「そうなんだよ、恵美のやつ僕を驚かせようとしてたらしいんだよな」

「サプライズ〜!」

涼子が言った。

「でも、恵美がわざわざサプライズにする必要なんてあるのかな?」

「サプライズ〜!」

涼子が同じことを言っている。

「俺に聞かれても分かんないよ。恵美に聞けよ」

「サプライズ!」

「なんだよ涼子、同じ事ばかり。恵美が僕にサプライズにしていたことは分かってるよ」

「うっん全然、分かってないよ」

涼子の言葉の意味が分からず僕は言葉を失った。

分かっている? 恵美がキャンプのことを黙っていた。僕を驚かせるために。けど・・・別の意味があるのか?

そんなことを思っていると、僕達はずいぶんキャンプ場に到着した。

rain1 - 4 カレー

キャンプ場についた僕らはさっそくテントの準備を始める。

テント製作班と食事の準備班の二つに分かれた。男はテント班、女は料理班。

運良く3人ずつだったので、綺麗に分かれた。

テントの設置というのは、結構大変だ。地面に釘を打ち付けたり、重いものを運んでいたりすると、すぐ体力がなくなる。

僕は、高校時代陸上部だったので体力には自身があったが、それでもかなり大変だ。当然おなかもすぐに空く。

テントの設置が終わり、おなかの減りがちょうどよい頃になると、料理班の料理も出来上がりつつあった。

目の前にはキャンプの定番とも言えるカレーがあった。

恵美の作った料理。いつもお父さんに作ってるんだからきつとおいしいんだろうな。僕ははやく食べたくてうずうずしていた。

恵美は相変わらず、何に対しても一生懸命だ。このカレーに対してもきつと精一杯がんばったんだろう。

恵美の額には汗がにじんでいた。他の女の子2人にも汗がにじんでいるが、恵美の汗は僕にとっては格別に綺麗に見えた。

そしてついに、カレーも完成し、さっそくみんなで食べ始めた。カレーをごはんに乗せ、食べる。

とてもおいしい。ほどよい辛さが美味さを綺麗に引き出している。みんながおいしそうな表情で食べている。

恵美が突然僕のほうを見て聞いた。

「聡、どう？おいしい？」

恵美の突然の質問に多少驚いたが、僕は正直に答えた
「うん、おいしいよ。ほんとにおいしい」

「みんな、このカレーほとんどは恵美が作ったんだよ！私達は手伝っただけ」

グループのリーダー格の涼子が言う。

「へえ〜！そうなん？恵美料理うまいじゃんか！」

健二がテンションを上げていう

「えへへ、そんなことないよ〜」

恵美は片手を頭の後ろに当てて、照れ笑いをしている。いつも笑顔でいる恵美の無邪気すぎる笑顔。まぶしすぎて、目のやり場に困ってしまう。

ずっと見ていたのに、つい目を逸らしてしまう。

ずっと見ていると、自分の気持ちを恵美に悟られそうだから。

でも、いつかは自分から恵美に気持ちを話すときが来るだろう。

恵美に対する気持ちを。

『好き』という言葉を。

rain1-5 毛布

このキャンプ場はこの辺りだと有名ならしい。
なにが有名かというと、星の綺麗さ。

この辺りは空気が乾燥しているため、夜の空はとても澄んでいて星の輝きがとても綺麗だそうだ。この辺りで一番の夜景ポイントといっても過言ではない。

幸い今日の天気は晴れ。

そのおかげで、この暗い天体には満天の星が映し出されてした。
都会では見ることが出来ない星の数。

遥か遠くから届いているこの光りは、まるでダイヤを散りばめたかのように輝いていた。

みんなはアルコールも入っていて、盛り上がっている。

宴のようなノリだ。騒いで騒いで、歌って踊って、酔いつぶれて次第にみんな寝ていく。

気が付くと、僕と恵美の2人だけが起きていた。

恵美はみんなに毛布を掛けて回っていた。相変わらず気が利く子だなと思いつつ僕はその光景を見ていた。毛布を掛け終わると、恵美が一枚の毛布を持って僕に近づいて来た。

「はい」

恵美はそう言っ僕に毛布を差し出す。

季節はまだ三月、キャンプをするにはまだまだ肌寒い時期。

朝晩の冷え込みはまだ寒さを体に植えつけている。

毛布なしでは身震いしてしまう。

僕は、恵美から毛布を受け取るとあることに気がついた。

「あれ？恵美の分は？」

恵美が持ってきたのは一枚だけ、僕がこの毛布を受け取ると恵美の分がなくなってしまう。

「あゝ、あたしの分はね・・・」

恵美はそう言くと、僕の持つてる毛布を指差した。

僕はそのときに感じた。恵美がどうしようと言っているのか。

「あ、じゃあ・・・は、入る？」

僕は聞いたが、答えは分かっていた。

恵美は何も言わずにうなづき僕のすぐ隣に座った。

恵美も僕も体育座りをしていて、恵美の二の腕が僕の二の腕に当た
る。

その部分に神経が集中して、すこし体が硬くなっていた。

僕は恵美と一枚の毛布を共有していた。

一つの毛布の中に僕と恵美。

後ろを振り返ればみんながいる。けど・・・。

前を向けば、横には恵美がいて。2人きりの世界だ。

しばらく沈黙が続いた。僕も恵美もなにも話さなかったが恵美の体
温は、

二の腕から感じ取ることが出来る。

気が付くと恵美の視線は空に向いていた。

そして、恵美の口が開いた。

rain 1 - 6 流れ星

「寒いね」

恵美の口から声が出る。僕は聞き逃すことなく即答した。

「うん」

恵美と一つの毛布に入っているという極度の緊張から、単純な返事しか出なかった自分に腹が立つ。しかしそんな気持ちとは裏腹に僕の口からは次の言葉が飛ぶことはなかった。

また沈黙が続いた。

僕も、とりあえず星空を眺めることにした。

星が満天にでていてとても綺麗だった。

大好きな子のとなりでこんなにも綺麗な星空をみることが出来るなんて、きつとこういうのを幸せっていうんだな。

「あ！流れ星！！」

恵美が突然叫んだ。

「願い事しなくちゃ！」

僕は恵美が見た流れ星を見逃してしまっただが、恵美の取る行動は見逃さなかった。恵美は両手を胸の前で組み、目を閉じて願い事をしているようだ。

綺麗な恵美の横顔に僕はしばらく見とれてしまっていた。

それに気が付いたのか目を開けた恵美がこっちを見た。

これだけの近距離で恵美と目が合ったことに動揺してしまった僕は、とつさにありきたりな質問をした。

「なにを願ったの？」

「内緒」

恵美もありきたりの答えをした。

でも恵美の顔は笑顔だった。この近距離で見る恵美の笑顔、いつもとはまた違って見えた。

しかし、恵美はさっきから僕から目を離そうとしない。僕は恥ずかしさのあまり再び恵美の目を見ることもできずに前を向いたまま言っ

「な、内緒か。まあそりゃあそうだよ。でも気になるな、ハハ」
「気になる？じゃあ教えてあげよっか？」

恵美の意外な即答に僕は驚いて、恵美のほうを見た。

また恵美と目が合う。恵美は相変わらず笑顔だった。

「教えてあげるから、一つお願い聞いて」

僕は、恵美の突然の申し出に驚いた。

心臓が破裂しそうなくらい脈打っている。

鼓動が隣にいる恵美に聞こえないか心配だ。

「そのまま、あたしの目をずっと見てて」

僕の、頭の中は混乱していた。

恵美の突然の予想もしていなかったお願い。

そんなこといまままで言われたことなんてなかったから。

僕は黙ってうなづくことしか出来なかった。

rain1-7 告白

僕はいま、好きな子。玉木恵美と一枚の毛布を共有している。
恵美の腕が僕の腕に当たり、恵美の体温が伝わってくる。

そして、僕の顔は恵美のほうを向いていて、すこししか離れていない恵美の綺麗な眼が僕の眼をじっと捕らえて離さなかった。

「あたしがした願い事はね・・・」

恵美の口が開いた。僕は耳に神経を集中した

「幸せな日々がやってきますようにって」

恵美の意外な答えに僕は大きく眼を開いて、そのまま眼を離そうとしたが

「まだ駄目！」

恵美の当然の声に反応して、僕の動きは止まった。

「え、恵美？」

恵美の綺麗な眼が少し大きく見えた。それは恵美の眼にあるものがレンズの役割を果たしているからだろうか。恵美の表情は相変わらず笑顔だが。

「あたしはね、幸せになりたいって願ったの。いまも幸せは幸せなだけだね。これ以上の幸せがほしいなんて欲張りかもしれないけど・・・」

僕は恵美の眼を見ながらも息を飲んだ。

「でもあたしは、聡と一緒に幸せになりたい」

恵美のその言葉に頭が真っ白になった。ちゃんと聞いたはずなのによく分かっていなかった。そんなことを恵美は知ることもなく続けた。

「あたしは、聡が・・・好き」

僕は額に汗をにじませていた。肌寒いこの季節にもかかわらず、僕の体は高熱を発していた。頬が赤く染まる。自分でも分かる。でも恵美のいった言葉を理解できるほど僕の頭は回らなかった。でもすぐ近くにある恵美の顔を見ると、恵美の頬も赤くなっていることに気が付いた。

そして、それを見た僕は恵美がさっき言った言葉を理解した。

恵美から言われた予想を遥かに超える言葉。まさか恵美が僕のことを。

いつかは自分で言うつもりだった告白の言葉

好き――――。

それを恵美に先に言われてしまった。僕の好きな子に……。「……、僕も……。実は……。恵美が……。好きなんだ」もう、先には言えない。それでも僕は、自分の気持ちを精一杯伝えた。

僕がそれを言い終えた瞬間、恵美の眼が大きく見開いて、恵美の笑顔から声がこぼれた。

「アハッ、ほんとに？」

僕はうなずく。

「ずっと、好きだったんだ」

恵美の眼に捕らえられていた僕の眼はいつのまにか恵美の眼を捕らえていた。

それから言葉はなかった。

空には星が満天に輝いている。そんな空の下行われた愛の告白。もう後ろにいるみんなは見えない。

僕の眼には恵美しか映らない。

そして、僕の眼にはどんな綺麗な星空にも負けない、恵美の綺麗な綺麗な無邪気で純粋な満面の笑顔が映し出されていた。

しばらくの間、僕らの間を言霊が飛ぶことはなかった。

なにか話しをしなければと思ってはいるが、何を話したらいいのか、まるで見当がつかない。

まだ僕の頭の中ではさっきの恵美の言葉がエコーのように繰り返して響いている。

好き。

実は恵美がその言葉の前に言ったことをあまりよく覚えていない。恵美のその言葉がほかのすべてを吹き飛ばしていた。

好き。

まるでこだまのように頭の中で繰り返される言葉。

僕は、必死にその言葉が出る前のことを思い出そうとしていた。恵美から毛布をもらって・・・、それから・・・。

好き。

よほど衝撃的だったのだろうか。

思い出せない。その言葉が他のことを思い出すのを阻む。

恵美も黙っている。でもその視線は再び空に向いていた。

恵美はいまどんな気持ちなんだろう。

うれしい・・・のだろうか？

僕はこんなにうれしいのだから・・・。きっと恵美も。

僕が恵美に伝えなければいけないことを、全部伝えなければならな
いと思うと、余計に言葉が出なくなる。

それでも僕は、必死の思いで口を開いた。

「恵美……」

その言葉に恵美は空に向いていた視線を静かに僕に向けた。

「ありがとう、僕のことを好きだって言ってくれて」

「ううん、こちらこそありがとう。ちゃんと聞いてくれて、聡の気
持ちも素直に言ってくれて」

恵美は笑顔だ。

「僕は……」

真剣な顔で恵美の眼を見た。

「僕は、この星空に、僕自身に、恵美に誓うよ」

恵美の顔には疑問符が浮かんでいる。

「この先にながあっても、どんなことがあっても、僕が必ず恵美を
守る。僕はずっと恵美の味方にいる。それを誓うよ」

「聡……。うん、ありがとう」

恵美の顔は相変わらず笑顔だが、この暗闇でも頬が赤いことが分か
る。

僕はそんな恵美が愛しく思えた。

僕は誓ったんだ。この星空に……。恵美に……。そして……。

僕自身に……。どんなことがあっても必ず恵美を守ることを。

僕の魂に……。誓ったんだ。

rain1 - 8 誓い（後書き）

rain1は終わりです。次回からはrain2。玉木恵美視点です。

rain2-1:お父さん

あたしには、母親がいない。

あたしがまだ物心つく前に病気で亡くなっただけ。

だから、あたしは母親をまったく知らない。

写真では見たことがあるけれど、母親のぬくもりはまったく知らずに育った。

その代わりといっってはなんだが、父親の愛を受けて育った。

お父さんは、あたしを育てるために、昼も夜も仕事に行き、帰ってきたら疲れて寝るだけ、次の日も朝早くから仕事に行く。

そのお父さんの頑張りのおかげであたしは大学にも行くことができた。

だから、あたしはその分家事を頑張った。

お父さんが仕事を終えて帰ってきたときに気持ちよく寝れるように、布団も綺麗にしておく、毎日部屋の掃除も欠かせない。

中学の時から、あたしがお父さんの分も食べ物を作ってきた。たまの休みの時にも作ってあげるとおいしいと言ってくれる。

あたしは、お父さんはすごい人だと思う。

あたしのためにこんなに頑張ってくれて、あたしはそれを理解していた。

だから・・・。

あたしは、お父さんに甘えたことなんか一度もなかった。弱音を吐いたことも、文句をいったり、怒ったりしたこともなく、ただただ笑顔で接してきた。

でも本当は……。

あたしは、その気持ちを知られないように、必死に笑顔でいた。自分で自分に言い聞かせて、甘えたり、怒ったり、文句を言わないように、いつも笑顔でいることを自分に望んだ。

だから……。

あたしがほんとうは寂しがっているなんてお父さんは気がついていなかったんじゃないかな？

学校でなにかあつて泣きたいとき、うれしいことがあつたとき、自慢したいことがあつたとき、見てほしいものがあつたとき、あたしは全部一人で……。

運動会や、授業参観にもお父さんは来たことがなかった。

遊園地や動物園にもお父さんといったことなかなかった。

それでも、必死にあたしのために働いているお父さんがつこよく見えた。

だから、あたしは強くなろうって決めた。

どんなことがあつても、どんなに寂しくても必ず笑顔でいるって。

それがお父さんにあたしの出来る最高の恩返しだと思つから……。

そして、あたしは聡に出会つた。

r a i n 2 - 1 : お父さん (後書き)

かなり長くあいてしまいません。

rain2 - 2 : 栗谷聡

聡に出会ったのは高校1年の時、彼は陸上部で毎日毎日朝練をしていた。

お父さんが朝早く仕事に行くので、することのないあたしは早く学校に行く。

すると彼は必ず朝練をしている。

もちろん彼以外にも朝練をしている人がいるが、あたしの眼には彼しか映らなかった。

彼の額から流れ落ちる汗がきらきらとまるで生き物のように流れ落ちる、あたしは毎日それを見るのが日課になっていた。

でもその頃はまだ聡の名前も知らなかった。

名前を知ったのは高校2年の春。

クラス替えて偶然同じクラスになったのだ。

最初は、恥ずかしくて声もかけなかったけど、同じクラスの特権っていうのかな？聡から朝、会うとあいさつしてくれるようになった。

「おはよう」

その何気ない一言があたしにとってはものすごく幸せな一言だった。毎日朝、聡の練習を見て、教室では毎日あいさつを交わす。

そして、気がつけば本気で聡のことを好きになっていた。

好きということを自覚してからはもっと聡のことを好きになった。その頃からあたしは、朝のあいさつ以外でも自分から聡に話かけるようになった。最初は勇気がいったけど、それもいらなくなるくらいに慣れて、あたしは聡と友達と呼べるくらいの関係になった。

その頃から、聡という時間が少し長くなった。
複数だけど聡と一緒に遊びにもいくようになったし、聡のことをも
っとよく知ることができるようになった。

そして、その頃にあたしは聡からあることを言われた。

「栗谷くんって呼ばれると堅苦しいから聡でいいよ、その代わり僕
も玉木さんのこと恵美って呼んでいいかな？」

私はうなずいた。

ずっと聡って呼びたかった。

ずっと恵美って呼んでほしかった。

あたしは幸せだった。

好きな人のそばにいて、友達で、同じ高校で、同じ大学に合格して。

そして、あたしは聡に告白することを心に決めた。

高校1年の時からの想いを聡に伝えることを・・・。

rain2 - 3 : 涼子

覚悟を決めたあたしは友達に相談した。友達はあたしが聡を好きなことを知っていたので積極的に協力してくれた。キャンプの計画から告白まで協力してくれた。

そうして、あたしは聡に想いを伝えることが出来た。

そして、聡の気持ちも知ることができた。

あたしは、幸せだった。

告白して付き合い始めてからはいろいろ変わった。

いつも朝、電車に乗るまで歩く道のりで聡と手を繋ぐようになった。帰りも・・・。

2人でデートもいったし。

初デートは、水族館だった。たくさん魚がいて話題も尽きることがなく。

とても楽しかった。

あゝ幸せってこういうことを言うんだなって本気で思った。

それなのにここ三日ぐらい、聡と話す機会が減った。

朝も帰りもあの道に聡はいない。あたしは1人で電車に乗って学校

へ行く。

学校に着くと聡は先に教室にいて、笑顔でいつもと変わらない調子であたしを迎えてくれる。

なぜ朝や帰りにいなくなっただのか聞きたかったけど聞けなかった。

なんかあたし1人だけおいてけぼりみたい。

そして、あたしは学校の帰りに一番見たくない光景を目にした。

そこには、聡と涼子と一緒に楽しそうに歩いていた。聡はあたしには気が付くことなくあたしの知らないほうへと歩いていく。

追いかけることが出来なかった。怖かった。この関係が終わってしまふことが・・・それが怖くて追いかけることも出来ず、独りその場で泣くしかできなかった。

rain2 - 4 : 信じる

次の日、あたしは学校を休んでしまった。行く気になれなかった。学校にいけば、聡はいつもと変わらない笑顔で迎えてくれるだろう。・ ・ ・ けど、あたしはその笑顔に返すことができない。見てしまったから・ ・ ・。

あたしは、何を信じればいいんだろう？ 大好きな聡、友達の涼子。

聡はあたしを好きだと言ってくれた。あたし達は今付き合ってる。

涼子はあたしが聡に告白するのを手伝ってくれた。あたしが聡を好きなのはもちろん知っている。でも・ ・ ・、聡と涼子は2人で楽しそうに歩いていた。

何を信じれば・ ・ ・。

突然携帯が鳴った。聡からだった。

突然学校を休んだから心配してくれているんだろうか？

でも、携帯をとる気にはなれなかった。何回ものコールの後、留守電に切り替わった。携帯から聡の声が聞こえる。

『恵美、今日学校休んでどうしたんだ？ 心配だから折り返し電話くれ』

心配？ 涼子と楽しそうに歩いていたくせに・ ・ ・。

また携帯が鳴った。メールだ。涼子からだった。

そこには、学校休んでどうしたの？と書いてあった。涼子にはとりあえず返信することにした。

返信内容は、行く気になれなかった。

ただそれだけ、顔文字も絵文字もなにも使わず、ただ一文だけ。

涼子からすぐに返信があった。

内容は、何があったか知らないけど明日は絶対来てね！と書いてあった。

行く気にはなれなかったけど、何日も学校を休むわけにも行かない。あたしは気分が乗らなかったが学校に行くことにした。

家を出ると、聡が笑顔で立っていた。

rain2 - 5 : 誕生日

あたしは、聡の後をなにも言わずについていく。

「どうした？元氣ないな？」

「そんなことないよ、まだ少し調子が悪いだけ」

「大丈夫か？今日も休んだほうがいいんじゃないか？」

休みたい…。本気でそう思った。なんか聡が無神経に見えてきた。あたしのことをもっとちゃんと分かってくれていると思っていたのに。

あたしがそう思っていると、聡は大学への道とは違うほうへとあるいていく。

「え？どこにいくの？」

「いいから、ついてこいよ」

あたしは聡についていくべきか悩んだが、なにかを期待していたのか、聡についていった。

聡にしばらくついていくと、そこは海だった。

あたし達の大学の近くには海がある。何度も遊びに来たことがある海だ。

予想外の場所にきたことに驚いたあたしは聡に聞いてみた。

「聡？どうして海に？」

聡はこつちを見て笑いながら言った。

「いいから！」

そう言うと、あたしの後ろに回り両手であたしの目を覆い隠す。そのまま聡に促されまっすぐ歩いていく。しばらく歩くと停まった。

「恵美……。おめでとう！」

そう言った聡はあたしの目を覆い隠していた手をどけた。その瞬間あたしの目には大海原が見えた。でも、それよりも、遥かに感動するものが見えた。

そこには、砂浜の砂で形作られた”恵美 誕生日おめでとう”の文字とケーキに見立てた大きなものがあつた。

「ごめんな恵美、ずっとこれを作っていたから最近あまり一緒にいなかったよな。どうしても今日の恵美の誕生日こういう形で祝いたくて、ほんとうにおめでとう」

あたしは、嬉しくてそして聡を信頼できなかった自分が恥ずかしくて、ただ泣くしかなかった。

そして、あたしは決めた聡を絶対に信用することを。

rain3 - 1 : 傘

、昨夜朝霧町のパチンコ店で玉木容疑者が62歳無職の男性を暴行の末、殺害しました。玉木容疑者は

「殺すつもりはなかった」

と供述しており朝霧県警は目撃者やパチンコ店に事情を聞き……、

そのニュースを僕が耳にしたのは、朝起きて食事をしながらテレビを見ていた時だった。そして、そんな時に突然彼女から電話がかかってきた。

『ごめん、聡。しばらく大学に出れないし、会えない』

驚いた僕は、

「えっ？ どういうことだよ、恵美」

と言おうとしたが、彼女はすぐに電話を切ってしまった。すぐにかけ直したが彼女が電話に出ることはなかった。

その日、大学で僕は朝のニュースでやっていたパチンコ店で暴行し、人を殺した玉木容疑者というのが僕の彼女の恵美の父親だと言うことを知った。

恵美は小さい頃に母親を病気で亡くしてから父と2人で過ごしてきた。だから恵美にとっては父親が唯一の家族だった。

そんな父親が人を殺したのだから恵美にとっても、彼氏である僕にとっても重大なことだ。

その後、数日間に渡り何度か恵美に連絡をとったが恵美が電話に出

ることはなかった。

事件が起きてから10日後、恵美から突然電話が、かかってきた。外は雨が滝のように降っていたが、そんなことなど気にもならないくらい恵美の声が懐かしく思えた。

『聡……、いまから会えない？大事な話があるの』

僕はおそらく父親のことでの話だと直感し、恵美と待ち合わせをした。

外は雨がすごい勢いで降っていた。僕の家から待ち合わせ場所まで歩いて15分ほどなので、傘を手に取り、歩いて待ち合わせ場所に向かうことにした。

雨がかなり激しく降っているせいなのか、待ち合わせ場所まで20分ほどもかかってしまった。

待ち合わせ場所に着くとそこには恵美が、雨の中傘もささずにずぶ濡れになって立っていた。恵美が僕を見つけた瞬間

「あー、雨って冷たいんだね」

恵美がいつもの笑顔で言った。

「恵美……？」

「サトシ……、私のお父さんのことは知ってるよね？」

「……う、うん」

「なら、話は早いや」

恵美は一息ついて言った

「私、殺人者の娘になっちゃいました」

「……」

僕は返す言葉が見つからずただ立ちすくんだままだった。

「私はね、お父さんは罪を犯したんだからちゃんと罰せられるべきだと思う。お父さんもちゃんとそれは分かっている」

「けど……、それでも…、お父さんはお父さん、私は私で見えてほしかった」

「恵美……？」

「……聡、世間っていう雨はね、とても冷たいんだよ」

「雨に濡れまいと、どんなに必死に振り払っても絶対に濡れちゃうんだもん」

「雨に濡れて、私はもう心も身体もびしょびしょだよ」

「……そ、そんなの気にするなよ！いま事件が起きたばかりだからだよ！時間が経てばそんなこともなくなるさ」

僕はただ在り来たりの言葉を並べるしかなかった。

「……そうかもね、でも」

「だけど、やっぱり雨は好きじゃない」

「だから……」

「だから……、別れよ私達」

「私と一緒にいたら聡まで冷たい雨に濡れちゃうよ」

恵美のその言葉を聞いて、立ちすくんだままだった僕の身体はようやく動いた。

僕はゆっくり恵美の立っている所に歩みより恵美の頭上に傘を持つていき恵美言った

「いいんだよ、濡れても」

「僕は確かに恵美の濡れた心を乾かせる太陽にはなれないかも知れない」

「けど……、どんなに激しくて冷たい雨が降っても太陽よりもっと近くで恵美が濡れないように守る傘にはなれる」

「僕が恵美の傘になって恵美が濡れないようにずっと守っていくよ」

「だから別れようなんて言っな」

「本当に、それでいいの？」

恵美は僕に問う。

「それでいいって言うか…、それが生きる意味だからな」

「恵美の笑顔を守っていききたいんだ、僕は」

「……うん、ありがとう」

恵美は恥ずかしそうにうつむく。

その恵美の姿を見て、僕は心のうちに秘めていた想いを打ち明けた。

「恵美、結婚しよう」

恵美は、その言葉を聞いた後傘からでて雨に濡れる位置に立った。

「恵美？」

「ごめん、できない。やっぱり、駄目だ」

「え？」

「あたしは、聡を本気で信頼しているから、嘘は付けない」

僕は、恵美の言葉の意味が分からずただ立ちすくんでいた。

「男の人を殺したのは、あたしなの」

僕は、その言葉に傘を持っていらなくなり、傘は静かに地面まで落ちていった。

rain3 - 2 : 君と共に

「どういう……」

僕は、驚きすぎて声が出ない。

「あの日、お父さんが朝からパチンコしに行っていつまでも帰ってこないからあたしがお父さんを呼びに言ったの。そこで、男の人と些細な事で口論になってその人があたしに掴みかかってきたの。だからあたしはそれを振り払ったの。そしたら、その人はバランスを崩してパチンコ台の角で頭をぶつけたの。そして、そのまま倒れて頭からは大量の血が。すぐにお父さんが救急車を呼んだんだけど、結局助からなくて。後で、事情を聞かれてその時、お父さんがあたしの代わりに犯罪者に……」

「恵美……」

僕は、恵美の言葉になんて声をかけたらいいか分からなかった。恵美が信頼して僕に真実を話してくれたのに。

「あたしは、今から自首しに警察にいくね」

恵美はそういうと雨に濡れながら僕のいるほうとは反対に歩き出した。僕は、恵美の背中を見ることができなかった。自分に出ることをなにより一つ見つけることもできずに。

でも、それでも僕の身体は自然に走り出していた。そして、次の瞬間には恵美の身体を抱きしめていた。

「恵美、僕が君を守る」

その後、僕と恵美は警察へと行った。恵美はその場で警察に逮捕された。

次の日、恵美の父親は釈放された。

そして、俺は恵美の父親と対峙した。

「君が聡君か、恵美から話は聞いている。君は恵美を好きでいてくれてるんだろ？　なら、なぜ恵美を守ってくれなかった？　俺が恵美の代わりに犯罪者となっていれば、恵美は……」

「そんなのは、本当の意味で守ることにはならない。そう思ったから。きつと、恵美は正当防衛ですぐに釈放されると思う。でも、恵美の中で人を殺したという事実は決して逃れることも代わることも出来ない。だったら、恵美にはそれを乗り越え、強く生きて欲しい。俺はそのための支えになりたい」

「支え？」

「僕達にはまだたくさん出来ることがあるよ。それは、恵美が出てきた時に笑顔で過ごすことが出来るように、努力するんだ。世間の目から守ることそれは僕らにしか出来ない。恵美の笑顔を守るために僕らが出来る唯一のことだ。そして、僕は恵美と一緒に生きていきたい」

数日後、保護観察という形で一応恵美は釈放された。正当防衛だという判断でとりあえず落ち着いたのだ。

きつと、これからもつと大変な時が待っている。でも、僕はずっと君の近くで守り続けていくよ。

それが、君と共に生きていくことを望んだ僕の生き方なんだから。

そして、僕らは二カ月後結婚した。

E
N
D

r a i n 3 - 2 : 君と共に（後書き）

すいません。恋愛小説苦手です。なんか無謀な挑戦だったような。どという風に書いたらいいのか、自分の作品なのに全然雰囲気は掴めませんでした。

読んでいただいていた方には、非常に申し訳ない気持ちでいっぱいです。出直して、次こそはより良い作品が書けるようにがんばりたいです。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8245a/>

アンブレラ ～君と共に～

2010年10月10日06時25分発行